

「ひな鳥を集めるように」

—マタイによる福音書講解説教 96—

詩篇

マタイによる福音書

説教

第118篇 26節～29節

第23章29節～39節

岡村 恒 牧師

『主の御名によってきたる者に、祝福あれ』(39節) そう私たちが口にして、神の幸いを謳歌する時が来る。聖書の御言葉は私たちの救いの完成について語ります。そして神がどういうお方か、主イエスは私たちにお示しになります。

主イエスは、この日どうしても我慢なりません。 「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざである。」(29節) 神に愛され、赦され、救われる道があるのに、わざわざそこを離れて滅んでいくことがあっていいはずがない。主イエスが見ていたのは、神の言葉に聞き従わない全ての人、私たちの姿です。ここで名指して批判されている人々は聖書の専門家でした。ところが主イエスは、そのような人々が、むしろ神から遠ざかっていることをご存知でした。

全ての人の救いのために、主イエスは十字架にかけられ、そこで私たちのために祈って下さいました。

「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」(ルカによる福音書23章34節) 今日の箇所は、お前たちが滅びることは耐えられない、そう語りかける言葉です。

「あなたがたもまた先祖たちがした悪の柙目を満たすがよい。」(32節) 神なしに生きようとする歩みを最後まで歩み通すなら、神に捨てられ、滅び去っていくほかありません。しかし、主イエスは天の父がどういうお方かを描きます。「ちょうど、めんどりが翼の下にそのひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。」(37節) これを聞いた人々は、めんどりが外敵からひななどを守り、身を呈して、その子らを愛し養い育てる姿を、日常的に目にしていたでしょう。壮絶な命懸けのめんどりの姿が人々の心に映ったかもしれません。

旧約聖書全体が、このめんどりの姿を描いています。神の民は何度も神に背を向け、裏切りました。連れ帰ってもすぐにその翼の下から逃げ出してしまふ。神は、決してあきらめないでひななどを連れ戻そうとしてくれました。私たちもそうです。神に愛され、選ばれ、招かれて、神のみ言葉の前に進み出る機会を得ながら、この聖堂を一步外に出たとたん、神などいないかのように生き始めてしまふ。

神は神の民たちを幾度となく集めようとなさいました。そして、最後に主イエスを送って、徹底的な仕方、私たちが神のものとして取り戻して下さいました。「わしとその巢のひなを呼び起し、その子の上に舞いかけり、その羽をひろげて彼らをのせ、そのつばさの上にこれを負うように、主はただひとりて彼を導かれて、ほかの神々はあずからなかった。」(申命記32章11～12節) ユダヤ人が右往左往して心を惑わされるのに対して、真の神が、その翼を広げて守り、翼に乗せて、運び導いてくれました。

困難なとき多くの人々は祈り始めます。それが、神がお造りになった私たち本来の姿です。実は私たちはいつでも、嵐の只中で神のあわれみを求めている存在です。もし神のみ翼があなたの上に覆ってなければ、本当に簡単に押し流され、死の淵に沈んでいく存在です。神が救ってくださるなら全知全能なる神の赦しと愛の内に置いていただけます。

「信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見えない事実を確認することである。」(ヘブル人への手紙11章1節) 私たちには信仰が与えられていますが、繰り返し、神に背いてしまいます。しかし神は見捨てず翼を広げて、その翼の下に救い集めてくださいます。

主イエスは、やがて終わりの日、私たちが神の宮に入ることを約束されました。神の国の食卓を囲んで、神を褒め称える日が来る。神は今もその羽を広げて私たちをそこに招き入れようとし、働き続けておられます。主よ、あなたのみ翼の影こそ私のいるべき場所、本当の喜びと命あふれる場所、私の命を支え、私の希望をあふれさせて下さる場所。あなたが広げてくださったその翼の影に私は進み出ます。

主イエスは律法学者とパリサイ人の姿に我慢なりません。私たちの誰かが、神の救いを受け入れずに滅び去る道を歩んでいるとしたら、やはり主イエスは我慢ならないのです。信仰を受け入れて、神の祝福の中で歩みなさい。主イエスの招きに答えて、今日からまた新しく私たちの地上の旅、神のみ翼の影で、本当の平安と希望をいただく歩みへと進み出しましょう。

(記 説教要約奉仕者)